

Journal of Chubu University Education

No.17

2017

【教育スケッチ】

《エッセイ》

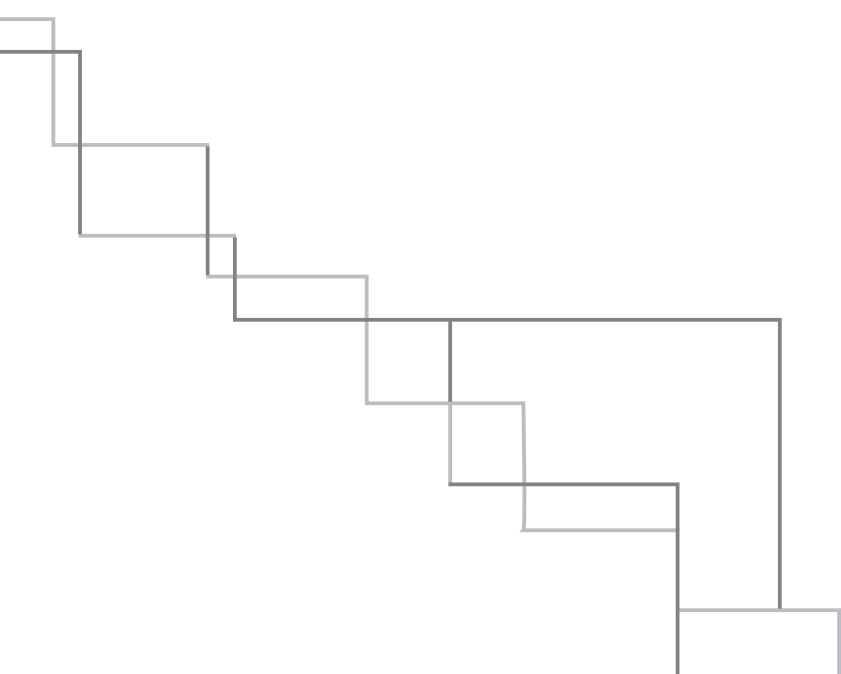
チャレンジサイトを通したコモンズコンシェルジュの関わりと

コモンズサポーターの育成について 平井芽阿里・岩間優希

【Educational Essays】

Commons Concierge Role and Development of Commons Supporter Human Abilities

..... HIRAI Meari and IWAMA Yuki



チャレンジサイトを通したコモンズコンシェルジュの関わりと コモンズサポーターの育成について

平井 芽阿里*・岩間 優希*

1 はじめに

本稿は、コモンズセンターを拠点とし2015年度、2016年度にわたって「チャレンジサイト」の一環として行われた「夢を叶えたOB・OGとトークライブで交流しよう！プロジェクト」の実践報告である。プロジェクトを通じた学生の人間力育成の試みをコモンズコンシェルジュの関わりも踏まえながら提示することにより、本学の教育研究に資することが本稿の目的である。

2 プロジェクトの目的と趣旨

本プロジェクトは、中部大学を卒業後、社会に出て夢を叶えたOB・OGを招き、経験や体験をトークライブという形で学生に共有させることによって、企画運営に参加する学生の人間力を養い、聴衆として聞きに来る学生がキャリアプランニング能力を身につけることができるものとして立案された。その特色は、卒業後年数の浅い20代30代のOB・OGを招くという点と、学生が自ら交渉や準備を行うという点である。比較的年齢も近い卒業生なので学生にとっても接しやすく、また卒業生の側にも学生に対する教育的効果を説明し、通常の講演会のようにいかないケースもある点を理解のもとご協力をいただいた。

学生へのコモンズコンシェルジュの教育方針としては、基本的に全てを学生主体とし、学生の人間力を養うためのサポートのみ教員が行う。例えば、プロジェクトの運営（招聘・日程・場所の確保）、広告と宣伝（ポスターとパンフレットの作成・配布・掲示）、当日の運営（司会・機器操作・OBやOGのアテンド・案内）、終了後のニュースレターの作成（執筆・印刷・配布）を全て学生が主体的に行うこととした。

期待した効果は二つある。一つ目は、本プロジェクト参加学生への直接的効果である。上記の行程を隔月で経験することによって、企画力、コミュニケーション能力、運営能力が身につくだけでなく、グループワークによる協調性、自らOB・OGとのやりとりを重ねることによる交渉力、主体性、さらにキャリアに関する知識や経験を養い、結果的に人間力が向上すること

を見込んだ。二つ目は、本プロジェクト実施による周囲の学生への効果である。常日頃学生の集まる不言実行館2階コミュニケーションエリアの横に位置するステージエリアを利用することによって、多くの学生に足を運んでもらうことが可能となる。また、学生が集まるスペースを利用することによって、偶然そこに居合わせた学生にも注目させる効果を狙った。

3 学生の活動

本プロジェクトには、コモンズセンターのコモンズサポーターから多様な学科学年の学生が運営者として参加した。2015年度には12名、2016年度には8名の参加者があった（表1、表2）。主となる活動は2か月に1度OB・OGを大学に招き、トークライブという形で自身の体験について語ってもらうものであるが、

表1 2015年度参加学生学科学年別

2015年度参加学生		
機械工学科	4年	1人
経営会計学科	4年	1人
中国語中国関係学科	4年	1人
コミュニケーション学科	3年	1人
コミュニケーション学科	4年	3人
応用生物化学科	4年	1人
環境生物科学科	3年	2人
環境生物科学科	4年	1人
幼児教育学科	4年	1人
合 計		12人

表2 2016年度参加学生学科学年別

2016年度参加学生		
機械工学科	4年	1人
電気システム工学科	3年	1人
情報工学科	2年	1人
国際文化学科	3年	2人
コミュニケーション学科	2年	1人
歴史地理学科	4年	1人
環境生物科学科	4年	1人
合 計		8人

*1 全学共通教育部 全学総合教育科 講師

それを実現するために多種多様な活動が行われた。

学生の活動は招聘するOB・OGへの交渉、連絡、日程の決定、ポスターとパンフレットの作成、当日運営、終了後のまとめとして壁新聞を発行することなど全般であり、これらの仕事を円滑に進めるため以下のような役割を設定した。

①**全体統括（ディレクター）**…全体の仕事が進んでいるかをチェックし、必要に応じて指示。コンシェルジュとの連絡係を務める。

②**AD（アシスタントディレクター）**…トークライブ中、マイクをまわしたり、事前のミネラルウォーター準備、懇親会の予約など。その他、ディレクターから指示を受けて必要な仕事を行う。

③**ゲスト対応**…OB・OGとの連絡係。メールでやりとりし、日程の決定、経歴を聞いてプロフィールをデザイナーやライターに伝える、当日来校したゲストの案内など。

④**ポスターデザイナー**…ポスターをデザインし、COMMONZコンシェルジュから了承が得られたら、ポスターの印刷・掲示と立て看板の作成・設置を行う。掲示・設置作業はデザイナーが主導し、他のメンバーを集めて全員で取り組む。

⑤**ライター**…ゲストのプロフィールなどを聞き、それをもとにパンフレット（当日資料）の作成を行う。COMMONZコンシェルジュから了承が得られたら、印刷・製本などを行う。

⑥**MC 1、2**…当日の司会進行、OB・OGにいろいろな質問をして話を引き出す。当日までに進行表と質問内容をつくっておく。

⑦**カメラマン・機械操作（当日）**…当日のビデオ撮影、PC設置、音響調整を行う（事前準備含め）。トークライブ終了後、撮影した映像を編集して広報用の動画をつくる。

⑧**壁新聞の記者（ジャーナリスト）**…トークライブや懇親会の写真撮影、来場者へのインタビューなどを行い、自分で見聞きしたことをレポートした壁新聞を作製する。当日の様子だけでなく、準備過程のサポーターたちの奮闘ぶりから取材し、記録する。

なお①から⑧は2016年度の役割一覧であるが、後述する点以外は2015年度も同様である。

以上の様に、それぞれの役割名称にはイベント運営業界の職名を積極的に採用し、トークライブ・プロジェクトを仕事として推進するという意識を持てるように配慮した。学生自身そうしたポジション名が与えられることによって興味と関心を持ち、自分の役割を楽しむことができたようである。

ただしここで述べておくべきは学生の責任感についてであろう。一年目は、学生の要望と自由な分担を尊重し、役割ごとに複数人が担当できることを容認した（なぜなら学生の「主体的」な活動を軸としているからである）。つまり、グループで一つの役割をこなすことを可能としたのである。この場合、何名かの学生は複数の役割を掛け持ちすることになった。次に、学生が多様な経験を積むことができるよう、トークライブごとに別の役割に変更することを可能にした。これによって学生が異なる種類の仕事を体験し、時には苦手だと思っていた事にもチャレンジすることを期待して採用した方針であった。しかしながら私たちCOMMONZコンシェルジュの見るところ、こうした体制には問題があった。

第一は、複数人で一つの役割を担当したことにより、責任体系があいまいになり、お互いが他人任せにできるようになってしまったことである。準備も滞る場面があり、トークライブ間際になってのポスター掲示となることもあった。次に、各回で役割を変更可能としたことにより、反省や気づきを次の回に活かすことができなかった。次の担当者に引き継ぎはしていたものの、やはりすべてを伝達するのは不可能であり、本人は予想していなかった部分でつまづくこともある。次の回にも同じ役職を担当するのであれば改善できるが、毎回担当学生が変わったために、経験が積みあがらず、同じ失敗をしている例も見受けられた。

そのため、2016年度は各役割必ず一人で担当すること、そして役割は全ての回において変更はしないことを条件とした。他の仕事もやってみたい場合に手伝わせてもらうのは可能だが、その場合でも責任者はもともとの担当者であることを明確にした。

こうした変更を行った結果、学生は自分一人しか担当者がいないため強い責任感を持って仕事に臨むことができ、健全なチームワークを実現した。また毎回の反省を次の回に活かすことができるため、回を重ねるごとによりよいトークライブの運営を実現することができたのである。全体としての成果は次項に述べるが、いずれにせよ適切な制度設計こそが学生のアクティブ・ラーニングにおける教員の役割であることが明確に表れた事例だと言える。なお、2016年度は前年度よりプロジェクト参加学生が少なかったものの、その分「少数精鋭」で高いパフォーマンスを挙げることができたのも重要な点である。頼れる者が自分しかないときにこそ、その人の能力を外に引き出す（educate）ことができるのであろう。



写真1 2016年第1回目ゲストの尾上さんと

4 サポーターの人間力について

本プロジェクト終了後、参加学生には、チャレンジサイトを通して身についたと感じる人間力について、それぞれの具体的な体験を例にあげながらディスカッションしてもらった。また、人間力とは何か、ということについて考えてもらうために、簡単な文章にもまとめてもらった。

まず、学生自身が身につけることができたと感じた人間力をそれぞれの役割ごとにまとめる。

①全体統括（ディレクター）

全ての学生の行動を把握し、連絡や報告、相談を行う必要があった。全体をまとめ、一つの目標を成し遂げることの難しさを実感しながら「統率力」を獲得できた。

②AD（アシスタントディレクター）

チャレンジサイト自体に自らもスケジュールを調整し参加する必要があるなど「計画力」を身につけることができた。

③ゲスト対応

相手の都合に合わせて交渉をする必要があるため、こちらが1日遅れると1週間も日程がずれてしまうこともある。他のメンバーへの情報共有もスムーズに行うことや「先を見た行動」の重要性を実感した。

④ポスターデザイナー

ポスターを掲示するために学内の全学部の事務室に足を運んだり、交渉したことで、人との「コミュニケーション力」が身についた。また、ポスターをデザインするために、いろいろなデザインについて考えるという「発想力」が身についた。

⑤ライター

ポスターデザイナーの役割には、事前の予告掲示にとどまらず、当日のスケジュールやゲストのプロフィール情報をまとめた冊子の配布なども含まれる。デザイン、レイアウト、文章、中部大学のドキュメントセンターへの印刷の依頼や印刷日時の設定等も全て自ら行うため、ドキュメントセンターとのやりとり、電話で

の対応なども通して、「主体性」と「対応力」を身につけることができた。

⑥MC

ゲストによるトークを受け、その話の内容から、その時聴衆が何を疑問に思うかを考え、そのタイミングで的確にゲストに質問することが重要である。また、ゲストが学生に何を伝えたいのかを感じ、その話題を膨らませるなど、タイムスケジュールや時間配分を臨機応変にすることが必要である。トークライブの流れをしっかりと把握し、予定時間を超過しないよう常に時間を気にしながらゲストとの掛け合いの流れを誘導することがMCにとって最も大切な役割といえる。

⑦カメラマン・機械操作

時間内に終わらせるための「調整力」、当日までに何をすべきかを考える「計画性」、当日の進行が進まないときに、その場で考えて行動する「アドリブ力」が身についた。

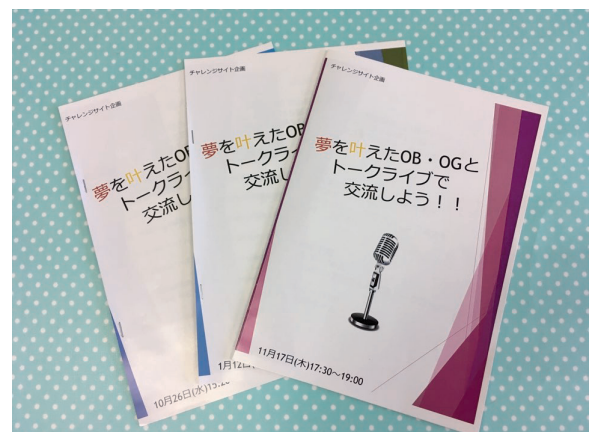


写真2 毎回趣向をこらした当日パンフレット

⑧壁新聞の記者（ジャーナリスト）

壁新聞の作成は、全体のスケジュールや運営状況の把握、ゲストや参加メンバーへの取材にとどまらず、写真撮影や壁新聞の記事の作成、レイアウトやデザインにいたる複数の事柄をこなす。どのようにして「文字で情報を伝えるか」ということが難しかったため、当日来ていない人が見ても、トークライブの様子が伝わるように心がけ、ゲストの魅力を紙面に最大限出す点を重視した。

以上のように、学生が自らの経験を通して身についたと感じた人間力についてディスカッションしたり文章化することで、改めて認識させることをねらいとした。さらに、参加学生には、チャレンジサイトを通して今後社会で必要だと感じる人間力について、反省点も踏まえながらまとめてもらった。

学生には、個別の役割の他、各自で広報活動なども行ってもらったため「誰かがやってくれるであろうと

いう甘い考え」によって、広報活動や事前準備が他人任せになってしまう部分があり、「自分のことだけを考えるのではなく、周りの事も把握し行動していくことも、今後社会で必要だと感じました」という反省も見られた。

また、企画力という力がとても重要であり、難しいものであると実感した、という声が多く上がった。「トークライブという企画を成し遂げるために、ゲストとの交渉、ライブの日程調整、本番の流れの構築、より効果的な宣伝作業など、様々なことを考え計画的に実行していかなければならなかった。現実的に実現可能であるか、ということなども考えながら企画を立案し、運営することは、将来社会に出た時に必要となるプロジェクト能力の成長に他ならない」という意見もあった。

そして、チームで一つのことをするためには、一人一人が自分の仕事をやるだけでなく、協調してまとまらなければよいものがつくれない、ということを実感し、そのためにも今誰が何をどのように活動しているのか、という報告や連絡というコミュニケーションの必要性を感じた、との声も多かった。

このように、学生たちが達成できたと感じている点、不十分であったと感じている点を含め、彼らが自身の体験や人間力の獲得について経験を振り返り述べた内容は、「自ら考える力」としての人間力の十分な成長と向上を見ることができるといったものであった。

さらに、チャレンジサイトから始まった学内新聞『コモンズタイムス』を2017年度も学生自ら継続している点も、チャレンジサイトを通し獲得した人間力を発展させ、社会への糧にしていこうとする積極的な姿勢と捉えることができるだろう。



写真3 2017年第1回ゲスト青木さんと

5 成果

以上、本プロジェクトの目的は①プロジェクト参加学生が自らトークライブの企画・運営の体験をすることによって人間力を向上させる、②トークライブを聞きに来た一般の学生がOB・OGの経験から学ぶ、という二重の効果をもたらすことであった。

上記の目的に照らせば、①の点はプロジェクトを振り返ってなされた学生たちの反省からも、大きな効果があったといえる。②の点についても、トークライブに参加した一般学生からは、「自分の人生を考える上で貴重な経験になった」「留学について迷っていたが、挑戦しようという気持ちが強くなった」との感想が多数寄せられ、本企画を開催した目的の重要部分を達成することができたといえる。

謝辞

本プロジェクトの進行にあたり、ゲストになることを快く快諾し、コモンズサポーターの人間力育成に積極的にご協力いただいたOB・OGの方々には、この場をお借りして、心より厚く御礼を申し上げます。

Commons Concierge Role and Development of Commons Supporter Human Abilities

HIRAI Meari* and IWAMA Yuki*

* Lecturer, Division of Interdepartmental Education, Faculty of General Education, Chubu University